

抗菌薬適正使用の取り組みと薬剤部の役割

～抗 MRSA 薬・カルバペネム系抗生物質届出制による 2 年半の成果を踏まえて～

渡邊百合子¹、小倉潤子¹、中野泰寛¹、新行内亮¹、増田裕一¹、平原一也¹、大江和夫²

¹医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院 薬剤部、

²上尾中央医科グループ 本部 薬剤部

【目的】

抗菌薬適正使用の推進は耐性菌制御や監視を行う為に重要で、感染対策の一環として不可欠であるが、感染症科や専従の専門医がいない状態では主治医の裁量に任せた抗菌薬療法が行われがちである。当院では薬剤部が中心となり、感染対策委員会、薬剤適正使用委員会と連携し、抗 MRSA 薬・カルバペネム系抗生物質（以下特定抗生物質）を届け出制としている。当院のシステムと届け出制後 2 年半の成果を紹介し、抗菌薬適正使用における薬剤部の役割を紹介する。

【方法】

特定抗生物質使用時は全例、1.使用届を薬剤部 DI 室に提出。2.抗 MRSA 薬は、投与指示量を基に血中濃度予測値を算出、医師と協議して投与量・投与方法を決定する。3.血中濃度の実測値で再度 TDM を行い、投与量・投与方法を再検討する。4.特定抗生物質使用中は、薬剤師が毎日患者状態を確認する。5.使用患者状況を 1 ヶ月単位でまとめ、適正使用か否かを薬剤適正使用委員会に、使用患者数の推移を感染対策委員会に報告する。

【結果】

平成 14 年 11 月～バンコマイシン、平成 15 年 4 月～全抗 MRSA 薬とカルバペネム系抗生物質と届け出とし、「2 週間以内の使用」「培養結果に基づく使用」「効果判定に必要な定期的な細菌培養の徹底」等を推進する為、薬剤適正使用委員会を通じ様々なシステムを導入し、医師の意識が確実に変わり漫然投与は減少、使用患者も限定された。

【考察】

抗菌薬適正使用の推進は院内の重要課題であるが、中心となる部門がないと一長一短では進まない。特に易感染状態の患者では感染症治療に難渋する場合も多く、治療開始時の確認や効果判定が重要で、薬剤部で患者状態を把握し情報を発信することは意義があると思われる。今後は、PK/PD を考慮した投与方法の検討や評価対象抗菌薬の拡大も考え、より適正な感染症治療に貢献していきたい。